
敦君の嫁探しっ！

織田一菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敦君の嫁探しっ！

【Nコード】

N3796S

【作者名】

織田一菜

【あらすじ】

口は悪いが容姿端麗、頭脳明晰、おまけに運動神経抜群な高校2年生、音羽敦。

モテる要素は数多あれど、恋愛に対しては奥手で鈍感なため、付き合い合った経験はナシ。

そんな彼が、祖父の一言で、いきなり嫁を探すことに！？

幼馴染やメイドをも巻き込んだの騒動は彼らの日常に波乱を巻き起こす。

最後に彼が選ぶのは

キャラ紹介（前書き）

織田です。

新しく連載始めました。
よろしくお願いします。

キャラ紹介

おとわあつし
音羽敦

身長185センチ、体重71キロ、A型。17歳。

世界的大企業『TOWA』の社長、昭一の孫。

やや細身だがしっかりと筋肉はある。

容姿に優れ頭脳明晰、運動も出来ると好条件そろっているが、超鈍感。

おこわしやういち
青羽昭一

身長188センチ、体重82キロ、A型。55歳。

世界的大企業『TOWA』の社長。

見た目はとても孫がいるようには見えないほど若々しく、筋肉隆々だが、喋りは年寄り臭い。

お茶目な一面もあるが早くに親を亡くした敦をかなり気にかけている。

ゆくゆくは才覚ある敦に社長を継いでほしいと願っている。

しいなみい
椎名未来

身長178センチ、体重68キロ。A型。17歳。

図書委員。

敦の幼馴染の一人で萌の姉だが、全く似ていない。

モデル並の容姿と優れた記憶力、それを生かす知恵がある。ただし本人は胸が小さいことを気にしている。

髪が極端に長い。

かなりモテるが、とある理由で告白はすべて断っている。

しいなもえの
椎名萌乃

身長147センチ。体重46キロ。O型。16歳。

敦の幼馴染の一人で未来の妹だが、全く似ていない。
小柄ながらスタイルが抜群に良いが、本人にとってはコンプレックス。

学校の勉強は出来る方だが、あまり頭は良くない。
カチューシャをずっとつけている。

かなりモテるが、とある理由で告白はすべて断っている。
特に委員会にも部活にも所属していない。

ひむろひかる
氷室光

身長184センチ、64キロ。B型。17歳。

料理部所属。

敦の幼馴染の一人。

『TOWA』には及ばないが、結構大きな会社の社長令嬢。
底抜けに明るく、誰からも好かれる。

他の二人に比べると運動は出来るが、学校の勉強は出来ない。
グラビア並のプロポーションだが本人にとってはコンプレックス（
というよりも、単純に邪魔だと思っている）。

また声もかなりハスキーだがそれは気にしている。
かなりモテるが、とある理由で告白はすべて断っている

ななみやえり
七宮絵里

身長167センチ、体重52キロ。A型。22歳。

敦の世話をするメイド。

元は社長令嬢だったが、会社が倒産寸前だった所を『TOWA』に
救われた礼にと大人同士の意向で敦の世話をすることになった。

かざまきじゅんへい
風巻順平

身長183センチ、体重68キロ。B型。17歳。

敦の悪友で、祖父や幼馴染三人より付き合いは短いが、四人よりも
敦のことを理解している。

光や萌乃をからかっているが、基本的には仲は良い。

あかがねみさき
銅実咲

165センチ。体重51キロ。O型。

敦達の担任教師。担当は社会。

美人でスタイルもよく童顔。

敦とは小さいころからの知り合いで、昔はよく勉強を教えていた。
敦が鈍感になっ たきっ かけの遠因。

第一話 そもそもどうして敦君が嫁を探さなきゃいけなくなったのか

「曾孫が見たいのお」

俺の目の前に座っている、とても高校生の孫がいるとは思えない若々しい姿をした大男　世界的企業『TOWA』の会長にして、非常に忌ま忌ましいことに生物学上では俺の祖父　青羽昭一おとわしやういちが、食事中に突然呟いた。

「は？　ついにボケたかこのもつろくクソジジイ」

「言い過ぎじゃ」

ジジイは言葉とは裏腹に嬉しそうにツッコミを入れる。

俺は当然のごとくスルーして自分の話を続ける。

「何が曾孫が見たいだ、だいたいその歳で曾孫がいる奴見たことねえよ。ギネスにでも載る気か？」

俺はこの男をジジイと呼んでいるが、実際のところまだ55歳を越えたばかりだ。

喋り方が古臭いわりに若い。

「それは若くして儂が勇人を、勇人がお前を生んだからじゃろっ？」

勇人は俺の親父の名前だ。

ジジイは19で親父を、親父は20で俺を産んだ。

「どっちにしろ、俺には無理だろ。相手いねえし」

「そこじゃ！」

「いきなり大声出すなジジイ」

「お前は儂や勇人に似て容姿端麗、頭脳明晰、おまけに運動神経抜群というのに　17にもなつて、まだ浮いた噂一つない！」

「さりげに自慢してるんじゃないやねえよ。っていうか、浮いた噂あったほうがいいのか？」

「当たり前じゃろが。その歳にもなつて女の一人も抱いたことがないとは　嘆かわしい。彼のガンジューは13の頃からすでにやることやっていたそうじゃぞ」

「知らねえよ。そんな偉人と比べるんじゃないやねえ」

「偉人に並び立とうと思わんのか」

「そんなとこだけ真似してどうすんだ」

「お前にはそんなとこくらいしか真似出来るそこはあるまい」

「そこを真似した所で行き着く先は確実にダメ人間だろ」

「むう、これだけ言っても儂に曾孫を見せぬ気か」

「いや、あんたガンジーの話しか言っていないからな」

「どーしても儂に曾孫を見せぬと言つのか？」

「別にどうしてもってわけじゃねえけど、今すぐは無理だろ」

俺がそう答えるとジジイは頭を抱えた。

「そんなに曾孫が欲しいのか？」

「産む気になつたか？」

「なつてねえし俺は産まねえ 単純な興味だ」

俺がそう答えると、ジジイはさもがっかりしました、という顔をす
る。

「その顔すつげえウザいんだけど」

俺がそう言つとジジイは深い溜め息をついて真剣な表情になる。

流石に世界をまたにかける大企業の社長だけあって、その表情には
凄みがある。

「それじゃ。お前はどついうわけだかお前をあんなに一生懸命に育
てた儂に向かつてそんな汚い言葉を使うひねくれた男になつても
うた」

「いや、あんたが育てたからだと思うが」

俺の両親は俺が生まれてすぐに死んだ。

だから、俺を育ててくれたのはこのジジイと何人かの家政婦だった。

「だいたい、さっき嬉しそうにツッコミしてたじゃねえか」

「あれは久々に孫と会えた喜びじゃ　とにかく、お前がそんな風に育ってしまったから、俺は思ったのじゃみ曾孫が欲しいと」

「　何で？」

「こんなにひねくれた孫よりも可愛い曾孫の方がいいじゃろうが」

「帰るぞ」

「冗談じゃ。今のお前そのままでは安心して『TOWA』を任せられんのじゃ」

「別に継ぐ気ねえし　曾孫とどう関係するんだ？」

俺がそう言つと、ジジイはまた溜め息をつく。

「子供が生まれると人は変わるんじゃよ　守るべきものが出来るからな。俺も勇人もそうじゃった」

「だから、俺も曾孫作つて変われってか？」

俺が訊くと、ジジイは頷いた。

どうやら一応ジジイなりに考えがあったようだ。

俺も一応考える。

生意気なこと言っても、様々な面でいつも助けてくれているジジイには感謝してるし、出来る限りジジイの望む通りにしてやりたいと思う。

だけど

「いきなり言われてもなあ」

いくらなんでも、相手もいない状況じゃ曾孫どころか結婚もありえない。

だいたい俺はまだ17だ。

結婚は出来ないし、子供を作ると世間的にもやばい。

「せめて恋人くらいなら　つくれないこともないかもしれないけどなあ」

俺が何気なくそう言った瞬間、ジジイの目が輝きだす。

「ほう、ということはあるんじゃない？」

「いや、ないけど」

「まあ、子供にも及ばんが　恋人も守るべきものに相当するじゃあ」

「おい、ちょっと待て、ないって言ってるだろ」

「いや、その恋人と婚約までいけば 嫁をもらうと同義 いや、法律を変えれば結婚も出来る」

「人の話聞けっ！ ってか勝手に話進めんな！ 何もっ告白成功する前提なんだ！ 相手いないっつてんだろっが！」

「ここまで来たら恥ずかしがらんでもいいじゃろ」

「いや、恥ずかしがって隠してるわけじゃねえから！ 本当にないだけだっつて！」

「またまたあ」

「ジジイうぜええっ！」

結局誤解は解けず、俺は恋人を探して婚約することになってしまった。

とりあえず、今日の教訓は『発言には気を付ける』だな

第一話 そもそもどうして敦君が嫁を探さなきゃいけなくなったのか（後書き）

誤字脱字がございましたら感想ページか

ブログ

<http://syousetukanni.blog133.fc2.com/>

mixi

http://mixi.jp/show_profile.pl?id=33773541&from=navi

にてお願いします。

第二話敦君とその幼馴染達

「　　というわけなんだ、協力してくれ」

俺は呼び出した三人に向かって言う。

「協力って　　私たちは一体何をすればいいの？」

いつもと変わらない無表情でそう言ったのは椎名未来^{しいなみらい}。

視力が悪く眼鏡をかけているが、その素顔はそんじょそこらのモデルでは太刀打ち出来ない程圧倒的な美しさだ。

腰まである長い黒髪を首の辺りで束ねていて、一度、邪魔じゃないのかと訊いてみたところ、おもいっきり睨まれた。

おそらく何らかの思い入れがあるのだろうが、もう二度と訊く気にはならない。

「だから、お前達にジジイの頼みを手伝ってもらいたいんだよ」

「そ、それって　　も、萌達に恋人になれってことですか？」

そう言ってそわそわしているのは椎名萌乃^{しいなもえの}、愛称「萌」。

歳は俺達より一つ下で未来の妹だが、全然似ていない。

姉が綺麗というカテゴリーで括られるなら、彼女は可愛らしいと言
うカテゴリーがぴったりとくるような感じ。

襟首のあたりで切られたボブカットに、つぶらで大きな瞳、ちよっぴり猫のような愛らしい口元で、髪型も姉とは違いセミロングの茶髪に以前俺が誕生日にプレゼントしたカチューシャをつけている。

身長も女性としてはかなり背が高く、足も長いが良くも悪くも起伏がほとんどない未来に対し、萌はかなり小柄だが出るべき所はしっかりと出て、引っ込むべき所はきちんと引っ込んでいて、かなり起伏が激しい。

性格もクールで冷静な姉とは異なり、どこかぼわわしていているとりにしている。

似てる所が全然ない姉妹だが、男子にモテるといふ点では似ているが、不思議と誰かと付き合っているという話は聞かない。

「いや、そういうことじゃなくてだな　俺をモテる男に改造してくれ」

「　そういう相談はダイジョーブ博士にでもしろ。野球もうまくなるぞ。確率は低いが」

呆れ顔で言うのは氷室光。ひむつひかる

『TOWA』には劣るが、かなり大きな会社の子供、つまりかなりのお嬢様だが、容姿も言動もかなり男っぽい。

身長は男の俺と同じくらいあり、声もかなりハスキーだ。

茶色のベリーショートに、大きな特徴的な唇、意思の強そう

な大きな瞳はなんとなく野生の虎を連想させる。

グラビアアイドルよりも凄そうなプロポーションとがさつながらも持ち前の人懐っこさで男女問わず人気がある。

未来、萌、光の三人は俺の幼なじみで、小、中、高と同じ高校を選び、未来、光とは全て同じクラスという奇跡的な仲で、おそらく一番俺と仲の良い友達だと思う。

こんな恥ずかしい事を相談出来るのはこいつくらいしかいない。

「いや、そんな一部にしか通用しないポケかまされても」

「ポケじゃねえよ。つつつか、お前の言ってることがポケだろ」

「へ?」

「へ? じゃねえよ」

「最悪なくらい鈍感ね」

「あの、気をつけないと嫌味だと思われちゃうですよ?」

三人が呆れた表情で（未来は溜め息付きで）俺をジーンと見つめる。

「な、何だよ」

三人は同時に後ろを向く。

（どっしり、これ）

（どうするもこうするも）

（きちんと言うしかないです）

「なにこそこそ話してるんだよ」

俺が訊くと三人は同時に俺を向く。

「あああつと お前に残念なお知らせというか喜ばしいお知らせ
というか」

「まあ、悪くはないと思うけど」

「敦さん、もう十分すぎるほどモテてると思つです」

三人があいまいな表情で言う。

「はあ？ どころが」

モテていたらこんな恥ずかしい相談するわけがない。

「お前この前のバレンタインデーの日にいくつチョコもらった？」

光が急に話を振ってきた。

「えつと いくつだっけ？」

「少なくとも、紙袋が必要になるくらいはもらってたわ」

「確か紙袋三つくらいを持ってたです」

そうだったっけ　　っていうか、こいつらよく覚えてるな。

「今年のクリスマス、あなた何人に誘われた？」

今度は未来が話を振る。

「覚えてないけど、結構多かったと思う」

「そのうち何人女子だった？」

「そこまで覚えてるわけないだろ」

「確か、9割方女子です」

だから、こいつら記憶力よすぎだろ

「誕生日のときも、色々な女の人からプレゼント貰ってたです」

「まあ、ありがたいことにな」

学校でみんなから有り余るほどのプレゼントをもらった。

「な、モテてんじゃん」

「いや、どこがだよ」

今までの話にどこにそんな要素が　　？

(なあ、今の流れで分からないってどういこと?)

(まあ、正直今更だけど)

(でもこれは鈍感すぎるですよ)

「だから何こそ話てるんだよ」

俺の言葉に反応するように三人は同時に俺のほうを向く。

「お前なあ　女子から誕生日プレゼントごっそり貰って、クリスマスに女子から誘われまくって、バレンタインにめちゃうくちゃチョコ貰える奴のどこがモテない男なんだよ！」

「誕生日にプレゼント貰えたのはその人にプレゼント渡してたからだし、クリスマスに呼ばれたのはクリスマス会みたいのだし、バレンタインに貰ったチョコ全部義理だし、モテてるっていうよりも友達が多いってことだろ」

「でも女子から良い感情がなければそうはならないわ」

「異性として良いかと友達として良いかはまた別だと思うけど」

「それは　そうかしれないですけど　でも普通いくら友達でも男の子をクリスマスに呼んだりはしないですよ」

「うーん　でもその、結構男子呼ばれてたぞ」

「あんと同じモテるのに彼女がない人達がね」

俺達が意見を交わしていると、光が手を挙げた。

「どうかした？」

「そもそもさ」

「何？」

「告白されるのを待つより、告白しに行ったほうが早いんじゃないか？」

「光！」

「何言ってるですか！」

光を未来と萌が取り押さえて部屋の隅に連れていく。

（あんたバカ？ それで敦がほかの女のところにいったらどうするの？）

（いや、十年以上も一緒にいて俺達の気持ちに気がつかないアイツだぞー！？ こういふときはちょっと刺激与えたほうが）

（こういふ状況だからこそ、何するかわからないですー！！）

「あの、三人とも、俺置いてけぼりにしないでくれる？」

俺が三人に言うと三人ははっとした表情で俺を見る。

今日の三人はなんか変だ

「しっかし、告白する相手かぁ」

正直、全然考えてなかった。

そうか、わざわざ相手の好みに合わせて告白を待つより、そっちのほうの手っ取り早いよなぁ

「ももももしかして、告白する相手がいるですか？」

萌がかなり慌てたような様子で俺にくっくと近づく。

「そ、そうなの？」

「マジかよおい！」

なぜか未来と光の二人も俺を問い詰めるように近づく。

かなりの圧迫感

「い、いや、とくにいねえよ」

「そ、そうですか」「そ、そう」「そうか」「

三人は同時に深い息を吐く。

「なんでそこでそんな安心したみたいなのリアクションなんだ？」

俺が訊くと三人が背後にギクツという文字が出るようなリアクションをする。

「い、いや、これは、その」

「べ、別にそんなことないわ。気のせいじゃない？」

「そうか？」

「そ、そうです、そうですよ」

萌と光が首をぶんぶん振る。

「まあ、それならいいけど」

なんか、触れてほしくないみたいだし。

それに、今はそれより先に考えなきゃいけないことがあるし。

「というかそもそも、お前の好きなタイプってどんな奴なんだ？」

「好きなタイプ？　一緒にいて楽しくて飽きなくて、俺が自然体でいれるような奴かな？」

「容姿？　全然気にしないけど。」

「はあ？　なんで？」

「なんでって　一緒に生活していくなら容姿よりも性格良いほうが絶対良いだろ。まあそういう意味では、お前らが一番好きなのかも　一緒にいて楽しいし、飽きないし、自然体で入れるし」

俺がそう言つと、三人は同時に赤面する。

「ななな何言つてんだお前！！ 馬鹿じゃねえの！？」

「あんたつて人は っ」

「そそそ、そんなこといきなり言われても っ」

「いや、だって本当のことだし もしかして、迷惑か？」

俺が訊くと三人はクビがちぎれんばかりの勢いで首を横に振る。

「嫌、迷惑だなんて全然！！ これっぽちも！」

「そっか、良かった っ」

こいつらに嫌われてたら俺はかなり鈍いってことになっちまうからな。

（す、好きって言われちゃったです っ）

（萌！ ニヤニヤしないの！）

（そういう未来も、気持ち悪いくらいニヤついてるって 俺もだ
けど）

（しょ、しょうがないじゃない、す 好きって、言われちゃった
んだから）

「おい、どうかしたのか、三人とも変な顔して っ」

俺が訊くと三人は一斉にはっとした表情になる。

「い、いや、別になんでもないわよ!」

「そう? ならいいけど」

「で、結局どうするんだ?」

光が話を変える。

「結局って 告白のこと? うーん まだ決めかねてるってトコかな 別に告白する相手もないし とりあえず誰でもいいからってのは嫌だしな」

「じゃ、じゃあ、私達の中から選ぶってことですか?」

「ん、ああ、今のところはそういうことになるか」

俺がそう言うと光がぐっと俺に近づく。

「なら誰を選ぶ?」

「はい?」

「この三人の中なら、誰がいい?」

光がマジな顔で訊いてくる。

「誰って」

俺が未来と萌に助けを求めようと視線を移すと、二人ともマジな顔をしていた。

「アレ　未来　萌　」

「誰なの？」「誰です？」

二人がハモると俺にぐっと近づく。

三人の顔が目前に（萌はかなり頑張っ
て伸ばしても俺を見上げてい
るが）迫る。

「えっと　三人とも好きだけど」

「そついうのはダメ。絶対誰か選
びなさい」

未来が少し赤面したまま冷静に告
げる。

そつ言われても　誰を選んでもい
い結果にならないのは目に見え
てる。

三人とも徐々に俺を追い詰めて
いく。

「えっと　その　一人なんて決
められないって」

「どうしてです？　私達のこと　
その　好きなんですよね？」

「まあ、そつだけど　でも三人
それぞれにいいところがあつて
一人には決められないって　」

俺がそういうと三人は顔を真っ赤にして俯く。

今のうちに

「って、逃げるな！」

光が逃げようとした俺の腰を掴む。

すると未来と萌も俺にしがみつく。

勢いよく床に倒れこむ。

「ぐ、離せ！」

「きちんと私達の良いところを言うまで離さない」

未来が真剣な表情で言う。

「はあ？」

「ちやつちやつと言っちまえ」

光がニヤニヤ笑いながら言う。

「いや、なんでだよ」

「さっき言ったのは嘘だったですか？」

萌がとびきり悲しそうな顔をする。

「い、いや違うけど」

「だったら」

三人がぐっと俺の顔に近づく。

「さっさと言え」「さっさと言いなさい」「さっさと行ってください」

逃げれそうもない。

第三話 敦君の家庭の事情

「ただいま」

疲労困憊で帰って来ると、中からウチで住み込み家政婦として働いてくれている七宮ななみやえり絵里さんが出て来る。

元々はどこかの大きな会社の社長令嬢だったらしいのだけど、不景気の波をモロに受け会社が倒産寸前迷までいった時にジジイがその会社を買収し、七宮一家は救われたらしい（買収された後はよく分からないが）。

救ったお返しなのか、結婚して辞めてしまった家政婦さんの代わりに絵里さんが来てくれた。

容姿はかなり綺麗で、元社長令嬢なだけあって、白い肌、艶のある長い黒髪、切れ長の瞳、それにすっと通った鼻筋は上品な雰囲気醸し出している。

なんとなく和服が似合いそうだけど、「胸がきついんです」と言っ
て未来に睨まれてた。

「お帰りなさいませ、敦さん」

七宮さんはいつも通り柔らかな笑顔で迎えてくれる。

この笑顔を見るだけでかなり癒される。

「だから敬語は止してくれって」

「そういつわけにはいきません。敦さんは私の雇い主でありますし」

「雇い主命令とかダメなの？」

「ダメです。ご飯出来てますよ」

絵里さんはそう言うつとリビングに戻る。

俺も靴を脱いでリビングに入ると、美味しそうな匂いが鼻の奥をくすぐる。

「ビーフシチュー？」

「はい、リクエスト通りです」

そういえば出かける前に言ってたっけ？

俺が椅子に座ると皿に大盛のビーフシチューが出て来る。

「沢山食べて下さいね」

「いや、これ多過ぎ」

「何処にお出かけしてたんですか？」

相変わらずマイペースな人だ

「ん、ちょっと相談しに光の家だね」

「相談　ですか？」

俺はジジイとの約束を話す。

「つつうわけで、恋人探さなきゃなんだけど」

「こ、恋人ですか」

「絵里さん、恋人になってくれる？」

僕が訊くと、絵里さんは一瞬で顔を真っ赤にする。

「へっ！　あ、い、いや、わ私は、その」

「あはは、冗談だよ」

絵里さんはウブでこついう冗談を言うとすぐに慌てるからからかいがある。

「じよ、冗談ですか」

絵里さんは安堵と落胆が入り交じったような表情になる。

「しっかし、どうしたもんかなあ、恋人なんかすぐに出来ないし」

「誰かに恋人のフリをしていただくのは如何でしょうか？　そ、その、なんでしたら私でも」

「無理無理、あのジジイにそんなことしたら本気にして法律変えてでも今すぐ結婚させようとするだろうし」

困ったことに、ジジイにはそのくらいの法律なら簡単に変えられる権力ちからがある。

「ですけど　今、敦さんに好きな人は、いないですよ？」

「んー、まあね」

というか、誰かを異性として好きになったことは人生で一度もない。

「だったら、そんなに焦らなくても　じっくりと探していけばいいと思いますけど　昭一様も、すぐに会わせるとはおっしゃられてはいないんですよ？」

「ま、そうなんだけどね　」

だけど、早いとこジジイを安心させてやりたい。

一応、あれでもまだ一人も付き合ったことのない俺の将来を心配をしているのだろう。

「ところで、敦さんは、どんなタイプの女性が好みなんですか？」

「肌が白くて長い黒髪で鼻筋がすっと通った胸が大きい人」

俺が迷わずすらすら答えると、絵里さんは一瞬で顔が赤くして慌てだす。

「え、あああの、そそそれって」

「冗談だよ。俺あんまり外見の好みないし」

「あつう あんまりびっくりさせないでください」

絵里さんがまた安堵と落胆が入り交じったような表情になる。

「だって、絵里さんすぐに慌てるし、こころろ表情変わるんから」

「敦さん 意地悪です」

絵里さんはいじけた声でぶくつと頬を膨らませる。

絵里さんにはこういう子供っぽい所もある。

まあ、可愛いからいいけど。

「ほら、そんな顔してるとせつかくの美人が台なしだよ」

「 どうせそれも冗談」

「冗談じゃないよ、これは」

それは本当だった。

というか、絵里さんを美人ではないと言う人間はいないんじゃないかな
ろつか。

「ほ、本当 ですか？」

「当たり前でしょ」

俺がそう言つと、絵里さんは照れと喜びが混じつた表情になる。

「そ、そうですかっ！」

「ところで、絵里さんの男性の好みってどんなの？」

「わ、私ですか!?!」

「うん、ちょっと興味ある　　ってか、好きな人いないの？」

「そ、それは　　」

絵里さんはこちらを向いて顔を赤くする。

「その　　秘密です」

秘密ってことは　　いるんだ。

「男性の好みも？」

「秘密　　です」

「そっか」

まあ、好きなタイプって結構恥ずかしいしプライベートなことだからなあ

「そ、それより、お代わりはいかがですか？」

「いや、まだ全部食べてないし」

絵里さんはなぜか慌てたように話を変える。

どうしたんだろうね？

第四話 敦君の毎朝の日常

「朝だよ、起きて」

「ん〜、後5分」

俺の朝は、まず寝ている絵里さんを起こすことから始まる。

普通家政婦さんの方が先に起きるもんだと思うけど、絵里さんが俺より先に起きたことは今のところ一度もない。

「ほら、さっさと起きるー！」

俺がそう言いながら布団を引っぺがすと、パジャマ姿の絵里さんはゆっくりと起き上がる。

「おふあよおしどいます〜」

「はい、顔洗って来て」

「ふあ〜い」

絵里さんがふらふらと洗面所に向かう。

この間に朝食を作る 時もあるけど今日の朝食は絵里さんが昨日大量に作ったビーフシチューだ。

絵里さんの分と自分の分を皿に入れ、一つずつ電子レンジに入れる。

レンジが仕事を終えた頃には絵里さんがうなだれた顔でリビングに来る。

「敦さん いつもすいません」

「いいよ、別に。朝以外は全部世話してもらってるし、これくらいしないよね。って言っても、今日は朝起こすだけしかやってないけど」

僕がそう言っても絵里さんの顔は晴れない。

「ですけど 本当は私がやらないといけないことなのに」

「じゃあ、さ。晩御飯美味しい物作ってよ。いつも楽しみにしてるからさ、絵里さんの料理」

励ますために俺がそう言っていると、ようやく絵里さんの表情が明るくなる。

「は、はい、分かりました！」

「じゃ、食べようか」

「はい！」

そしてようやく食べ始める。

カレーは一晩おくと上手いらしいけど、ビーフシチューにそれは当て嵌まらないようで、昨日よりおいしくはなかった。

食事を終わると急いで身支度を整える。

と言っても、制服を着て寝癖がないか確認するだけだけど。

「よし」

身嗜みを整え、鞆を持って玄関に行く。

「じゃあ、行ってくるから！」

「はい、気をつけて下さいね」

リビングから絵里さんが返事する。

外に出ると光が一人で門の外で待っていた。

「おはよう、光」

「ああ、おはよう。はい、これ今日の弁当」

光はいつも俺の分の弁当も作ってくれている。

なぜか自分が作っているとバレるのが嫌らしく、二人きりの時しか渡さない。

「いつもありがとな」

「いって、別にたいしたことじゃないし」

「未来と萌は？」

「ああ、まだ起きてないってさ。小母さんが言った」

未来も萌も朝に弱い。

見た目も性格も殆ど似てないのに、こつこつ所は似てるんだよな

「じゃ、迎えに行きますか」

「ああ、抜け駆けするとあいづらすっげえ怒るし」

「抜け駆け？」

「あ、いや、何でもねえよ！ほら、行こつぜ！」

光は俺の背中をバシバシ叩くと走りだした。

「いつもすみませんです」

萌が申し訳なさそうに頭を下げる。

なんか萌と絵里さんって性格似てる

「いいっていいって、別にたいしたことしてるわけじゃないし、萌は気にしなくていいって」

「それは、私は気にしろってこと？」

未来が光を睨む。

「そりゃあそうだろ。お前起こすのにどれだけ苦労してるか」

「しょ、しょうがないでしょ、朝は弱いんだから」

未来は顔を赤らめて俯きながら呟く。

未来を起こすのは光の役目で、俺は中には入れてもらえない。

なんでも「100年の恋も冷めるような姿」らしい。

どんな姿なんだろ

「今度は敦に起こしてもらおうか」

「だ、ダメに決まってるでしょ!!」

未来が珍しく大きな声を出す。

「じゃあきちんと毎朝起きることだな」

光が悪役のような笑みを浮かべる。

未来は一瞬悔しそうな表情を浮かべたが、すぐに元の表情に戻る。

「じゃあ、光も毎日ちゃんと一人で宿題やらなきゃいけないわね」

「な、何でだよ!？」

「だって毎日起こしてあげる代わりに毎日勉強教えてあげてるんじゃない。ま、そうなたらあなたの成績どうなるか見物だけど」

未来が意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「別に勉強くらい俺が教えてやるけど？」

「へ？ いや、いいつてそんな」

「ま、あんな解答見せられないわよね」

未来がクスツと笑う。

「そんな酷いです？」

「そりゃあ酷いわよ。珍解答のオンパレード」

「み、未来！」

光が慌てて未来の口を塞ぐ。

「き、きちんと明日からも起こしてやるからさー！」

「別に馬鹿でも気にしないけど 知ってるし」

「ば、馬鹿とか言つな！！ ちょっと考え方がぶっ飛んでて記憶力がないだけだ！」

「そ、そうか」

それを馬鹿というんじゃ と思ったけど黙っておく。

「ってか、そろそろ」

未来を離してやった方がいいんじゃないか？ と言う前に、光がバツと手を離す。

「こ、こいつ人の指舐めやがった！」

「あんたが私の口と鼻一緒に塞ぐからでしょこの馬鹿！」

いつも通り、未来と光の言い争いが始まる。

萌は曖昧な表情を浮かべ、ヒートアップする言い争いを見ている。

本当にやばくなったら止める気だろう。

こうやって馬鹿みたいなことをしながら、楽しく毎日を過ごしてる。

でも、もし誰かと付き合うことになったら 　こうやって三人と馬鹿やれることはなくなるんだろう。

それは 嫌だ。

だからジジイには悪いけど 　もう少しだけ、今のままでいたい。

三人と、少しでも長く 　楽しんでいたい。

そう思った。

第五話 敦君と学校での出来事

学校に着くと、学年の違う萌乃は自分のクラスメート達の輪に加わり、俺達は三人で自分達のクラスに行く。

教室に着くと、隣の席に座る奴から話し掛けられる。

「よ、今日も女連れで出勤かい？」

かざまきじゅんぺい
風巻順平、俺の親友で女好きな男だ。

かなりの美男子で、お洒落で性格もまあまあ良いが、不思議と誰かと交際したという話は聞かない。

やっぱり馬鹿でかなりの女好きという所がマイナスなのか

「なんか失礼なこと考えてないかい？」

「いや、別に」

俺がそう答えると順平は微妙な表情になる。

「で、どうなのよ？」

「何が？」

俺が訊くと順平は俺の耳元に近付き、小声で告げた。

（お前の交際相手、誰を選ぶんだよ？）

「ぶっ！！！」

おもいつきり吹きだししまった。

(何で知ってんだよ！？)

(お前の爺ちゃんが言ってたぞ、もうすぐ孫が結婚するって)

誰がするか。

というか、本気で法律変える気かあのジジイ。

(どうせお前のことだから光か未来が萌ちゃんだろ？ あ、七宮さんもいるか。誰にすんの？ より取り見取りじゃん？)

(お前なあ そんな簡単に決まるわけないだろ？ 大体なんでその四人が候補なんだよ)

(だっていつも一緒にいるじゃん)

(そりゃあ、幼なじみに家政婦だからな)

(いや、七宮さんとはかく、他三人はいくらなんでも一緒にいすぎだろ。登下校も一緒だし、休日も殆ど一緒だろ？ 普通ありえねえって)

順平はそう言つと俺を睨む。

(なんか、言ってるムカついて来た お前何であんなにモテてる

んだよ！)

(別にモテてるわけじゃないけど)

(じゃあ、どうして毎日毎日あんな美人のメイドに世話してもらって、あんな綺麗で可愛い幼なじみと毎日いちゃいちゃしてるんだよ！?)

(家政婦で幼なじみだからだよ!! いちゃいちゃしてねえしメイドって言うな!!)

「なーに二人でこそこそ話してんの?」

後ろから光が俺達の首に手を回してくる。

気付いてんのか気付いてないのかは知らないけど、胸があたってる。

「いや、別に何も」

「本当にそうかあ? 私の名前が出た気がするんだけど」

小声で話してたのに、どんな耳してるんだコイツ

「光、こいつと結婚しないの?」

順平が俺を指差しながら光に訊く。

いきなり何訊いてんだこいつ?

「はあ!? お前何言ってるの!? 馬鹿じゃねえ?」

光は意味分らないといった表情になる。

当たり前だ。

ただ声が大きすぎです、皆が一斉にこっちを見てますよ。

「いや、だってこいつ結婚あい」

「言っんじゃねえ馬鹿！」

こんなところで言ったらどうなるか

「で、何が言いたいんだよ」

光が順平を睨みつける。

「いや、だってお前こいつ好きだろ？ だからぶふう！」

順平が光に殴り飛ばされる。

「何馬鹿なことやってんだ馬鹿！ 殴り飛ばすぞ馬鹿！？」

光サン、もうしっかり殴り飛ばしてますが。

「馬鹿馬鹿言うな馬鹿！ 馬鹿って言った方が馬鹿なんだバーカ！」

子供か

「何二人して騒いでいるのかしら？」

未来が相変わらずの無表情で俺達の方を（と言うより光と順平の方を）見ながら言う。

「「だつてこいつが！」」

順平と光が互いを指差しながらハモリ、お互いに睨み合う。

実は似た者同士なんじゃないかこいつら　？

「　まあ何でもいいけど、あんまり馬鹿騒ぎしないでね、迷惑だから」

未来は僅かに呆れたような表情を見せると自分の席に戻っていく。

「お前のせいで怒られたじゃん」

「はあ！？　お前がいきなり」

「ほら、二人とも静かにしなよ、また怒られるよ」

ホント、懲りない奴らだ

「とにかく！　こいつとはなんにもないし、なんとも思っていないから！」

光が順平に詰め寄ると、俺が指差しながら強い口調で言う。

そこまで言わなくてもいいのに

「ただ、これはいつものことだ。」

昔からいつも一緒にいすぎてこう言われることは何度もあったが、そのたびに光も未来も萌もすぐに否定して来た。

「あ、そう」

順平は意外と冷めた目で光を見る。

「何だよ、何か言いたいことがあるなら言えよ」

「別に」

順平が言葉を繋げようとした時、教室の扉が開き、担任の銅実咲先生が入って来る。
あかがねみさき

いつも通り女子高生に間違われる童顔にナチュラルメイクを施し、スーツを身につけてはいるが、その上から白い薄手のジャンパーを羽織るといっややラフな格好で現れた。

「それじゃ、朝のホームルームを始める　その前に」

銅先生が俺の方を見る。

嫌な予感がする

「音羽、お前、嫁探してるって本当か？」

最悪だ。

第六話 敦君と先生の関係

「音羽君、もう結婚相手探してるの?」

「やっぱりお金持ちは違うんだね」

銅先生の不用意な一言によって、あっという間に俺の噂は広まり、俺は休み時間の間ずっと女子達に囲まれてしまった。

「あーいや、別にそういうわけじゃなくて、勝手にジジイが言うてるだけだから」

「えーでも、お祖父さんは本気で探してるんでしょ?」

俺が弁解しても、あまり効果がない。

「まあ、そうかもしれないけど、今のところ俺は全然考えてないし」

なるべくならこのままの関係性が良いとさえ思ってるし。

「そっいえば、恋人とかもないしね」

「付き合ったりしないの?」

「今のところは、考えてないかな。告白されたら考えるかも」

「へえ、じゃあ私でもいいの?」

「うん、考えとく」

「あちゃあ、ダメかあ」

みんなで話をしていると、後ろから誰かに肩を叩かれる。

「敦、先生が呼んでる」

振り向くと、やや不機嫌そうな表情をした未来が立っていた。

「先生が　？　何の用事？」

「私に訊かれても分からないわよ」

「ま、そうだね　先生は教務室？」

俺が訊くと、未来は首を横に振る。

「社会科準備室って言ってたわよ」

未来はそう言って踵を返しつかつかと歩き出す。

「お、おい、ちょっと待てよ！」

俺が未来の肩を掴んで止めると、いつも無表情な未来にしては珍しく明らかに不機嫌そうな表情をしながらこちらを向いた。

「何か用事？　まさか社会科準備室がどこにあるか分からないなんて言わないわよね」

「いや、そうじゃなくて　お前何でそんなに怒ってんだ？」

俺が訊くとさらに不機嫌そうな表情になる。

「別に怒ってないわよ、馬鹿」

未来はそう言うときより不機嫌そうな顔をして立ち去って行く。

バツチり怒ってるけど　？

未来の謎の怒りを解決出来ないまま、俺は社会科準備室の前に来た。

扉をノックすると、銅先生の「入って」という声が聞こえる。

「失礼します　」

中には銅先生が一人で椅子に座って俺を待っていた。

「遅いぞ、敦。ボクが呼んだら競歩で来い」

銅先生が冗談なのか本気なのかわからない表情で言う。

「それで何の用ですか？」

「まず一つ目は謝罪だ　朝はすまなかつたな。あそこまで話が広がるとは思わなかった」

銅先生はそう言いながら頭を下げる。

「別にいいですよ。騒がれるのには慣れてますから」

「それもどうかも思っけどな」

銅先生は苦笑いしながら椅子から降りる。

「で、もう一つは　その、結婚　のことなんだが　どうなんだ？　相手は見つかったのか？」

「見つかってませんよ　恋人もいないのに見つかるわけないじゃないですか」

俺がそう答えると、銅先生は嬉しそうとも悲しそうともとれるような、複雑な表情をした。

「そうか　お前モテるし、恋人の一人くらいはいそうだけだな」

「普通　教師ってそうゆう事奨励しないんじゃないんですか？」

「別に不純じゃなきゃ構わないだろう？　お前は真面目だしな座らないのか？　いつまでも立っていると疲れるだろう」

銅先生はそう言うと、自分も応接用の椅子に座る。

「用、終わったんじゃないんですか？」

「用がないとここにいないのかお前は」

そりゃあ好き好んでこんなところに来る人はいないと思うけど

「ボクが人を呼ぶなんて滅多にないことなんだぞ？」

「そりゃあ呼ばなくても誰かここにいますからね」

銅先生は男女問わず生徒からかなり慕われていて、この部屋は普段なら生徒が何人かいる。

「そう言う意味じゃなくてな」

銅先生が苦虫を潰したような表情をする。

「全く、相変わらずの鈍感ぶりだな」

「鈍感？」

俺が訊き直すと、銅先生は俺の目の前まで歩いて来る。

「お前に好意を持っている奴なら色んな所にいるってことだ。まあ隠してる奴もいるけどな」

銅先生は俺の方にぐっと近づく。

「教師がそんなことしていいんですか」

「今何時だ？」

銅が急にそんなことを訊く。

「5時 4分ですけど」

「だろう？ だったらもう教師の時間は終わりだ」

「そんなこと言ってるから教頭先生に怒られるんですよ、先生」

「先生？」

”銅先生”は不満げな表情をする。

俺は溜め息をつき、言い直す。

「みー姉」

「よろしい」

”みー姉”はそう言って満足げに笑い、俺の頭を撫でた。

実は銅先生とは、小さい時家が近所だったこともあって、昔からの知り合いだ。

昔からこんな冗談をしては俺をからかっていた。

”みー姉”はこの学校にくる前 教師と生徒の関係になる前の呼び名だ。

と言っても、普段この呼び方をするのは、光くらいだけ。

「で、お前の懸念については大丈夫だ。教頭は今日は一日出張」

「そういう問題じゃないんですけど」

「なんだ、まだ何か問題があるのか？」

「この状況見られたらお互いマズイでしょう？ 冗談でもこういふことはダメですよ」

「冗談か」

銅先生は何故か不満そうな表情をする。

「どうかしたんですか？」

「お前 相変わらず他人の好意を踏みにじってるな」

「『甘い言葉は耳半分で受け止める』って言ったのはみー姉です」

俺がそう返すと、銅先生は苦々しい表情を浮かべ、俺から離れ、僕の横に座る。

「そんなこと、分かってる」

「だったら踏みにじるなんて言い方しないで下さい」

「ああ、すまない」

銅先生は素直に謝ってくれた。

「それじゃあ、俺もつ行きますね」

俺がそう言いながら立ち上がると、銅先生は俺の制服の裾を掴む。

「何ですか？」

「大事な事言うのを忘れていた。恋人の話だけど、別にお前好きな人もいないんだから、今すぐ作るうなんて、焦る必要はないからな。まずは純粋な好意かどうか見極める目を身につける」

「分かりました」

「それじゃあ、行っていいぞ」

銅先生はそう言って裾を離す。

「それじゃ、また明日」

「ああ、また明日」

俺が言うと、銅先生は微笑んでひかえめに手を振った。

第七話 敦君と二人きりの下校（前書き）

書いてありませんでしたが、この物語は今6月です。
みんな夏服です。

第七話 敦君と二人きりの下校

「あ、敦さん、今帰るですか？」

社会科学準備室から出ると、萌とばったり出会った。

「ああ、用事も終わったからな　萌は、何でこんな所にいたんだ？」

俺が何の気無しに訊くと、萌は何故か顔を真っ赤にして俯く。

（お姉ちゃんが　ここにいて言ったから　）

萌はぼそぼそと何かを言ったけど、俺には何を言ってるか聞こえない。

「萌？　どうかしたか？」

「え！？　いいいえ、なな何でもないです！」

萌はあわてふためきながら手と顔をぶんぶん振る。

なんかよく分からないけど　まあ、本人がそう言うなら、あまり深くつつこまない方がいいな。

「未来と光は？」

「委員会と部活です」

未来は図書委員、光は調理部に入っている。

運動が嫌いで、本が好きな未来が図書委員は納得だけど、運動が大得意で体育ではどんな種目でも主役になる光が文科系の部活に入ってるのは未だに謎だ。

まあ、そのおかげで美味しい弁当が食えるわけだけど。

「萌も用事ないんだろう?」

「あ、はい。もう後は帰るだけです」

「じゃ、一緒に帰るか」

「え は、はいです!」

萌が顔をパツと輝かせて返事をする。

そこまで喜んでくれると誘ったかいがある。

「じゃあ、準備してくるから玄関で待っていてくれるか?」

「はいです!」

萌は満面の笑みで駆けてく。

廊下は走ったら危ないけど そんなことを言う暇もなく去って行った。

相変わらず足速いな

俺も急いで準備しないとな。

超特急で準備して玄関に向かうと、萌がもじもじしながら立っていた。

「待たせて悪いな」

「い、いえ、全然大丈夫です！」

萌はこつちを満面の笑みで見る。

「じゃ、行くか　どっか寄りたいたいところある？」

「え？」

「いや、どうせならどこか寄っていこうかと思って。せっかく二人きりだしな」

「ふ、二人きり　」

萌はなぜか真っ赤な顔でその言葉だけを繰り返す。

「あ、やっぱり嫌か？　それなら二人を待ってた方が　」

「い、いえ、全然そんなことは！　というか望んでたくらいで！」

「望んでた？」

「あ　いいえそれはその言葉のナントカって奴で　とにかく気にしないで下さいです!」

「あ、ああ　分かった」

いつもおっとりしてる萌がものすごい勢いで詰め寄って来て、つい頷いてしまった。

「じゃ、じゃあ行くです!」

萌はそう言ってさっさと外に出ようとする。

「お、おい!　靴!」

内履きのまま。

とりあえず俺達はデパートに移動した。

「どこにする?」

「わ、私はどこでも　」

萌はさっきからこんな調子だ。

顔も結構赤いし、どうも様子がおかしい。

「なあ、萌」

「は、はい！」

「どっか体の調子悪いのか？　なんか顔も赤いし」

俺の質問に萌は首をぶんぶん振って否定する。

「そ、そんなことないです！！　全然全くいたって健康体ですよ！」

「な、ならいいけど」

やっぱりどこか様子が変な気がする。

だけど、萌にはそれを言うことを憚られるような迫力があつた。

「あ、敦さんは行きたい所とかないんですか？」

「俺？　俺も別に」

そもそも、光に弁当を渡すために時間を潰そうと思つて来ただけだし。

しかし二人とも行きたい所がないとは　正直困つた。

やっぱり、こういう時は誘つた俺が責任持つて決めるべきだよな

「じゃあ　とりあえず何か食べるか」

「え？」

「いや、腹減ったから　暑いしアイスでも食べようかと」

「アイスですか」

萌は少し困ったような表情になる。

「あれ、嫌いだったっけ？」

「い、いえ、そういうわけじゃないですけど」

「じゃ、行くうぜ。確かこの近くにあったはず」

ちよつと探すとアイス専門店が見つかった。

「いらつしゃいませ！　何にいたしますか？」

店員が営業スマイルを浮かべながら注目する。

「何がいい？」

俺がメニューを見ていた萌に訊くと、

「えっと　ストロベリーで」

「じゃあ、チョコレートとストロベリーで」

「かしこまりました！」

店員がこなれた手つきですぐにアイスを用意する。

「300円になります!」

萌が財布を取り出す前に、俺が料金を払いアイスを受け取る。

「え、あ、あの」

「奢るよ」

「そんな、悪いですよ!」

「いや、誘ったのは俺だし」

「ありがとうございます!」

店員が「ここで言い争うな」と言いたげにお決まりのフレーズを使うと、萌は引き下がった。

「す、すいませんです」

「だからいいって。ってか、あれだけでそんな謝られると逆に重いつて」

俺がそう答えながらアイスを手渡そうとすると、萌はとてつもなくショックを受けた顔になる。

文字で表現するなら、ガン×3くらい。

「ごめん、言い過ぎた」

「いえ　大丈夫です」

萌が全く大丈夫じゃなさそうな感じで答え、俺から何故か目の前にあるストロベリーアイスではなく、バニラアイスの方を取る。

「あ、おい」

俺が声をかけた時には萌はバニラアイスを口に含んでいた。

味の違いに気がつかないのか、萌はすぐにまた二口目を口にしようとする。

「萌、それ俺のなんだけど」

萌はそれでようやく気付いたらしく、ハッとして、目を白黒させる。

「あ、ああの、ごめんなさいです!」

萌はそうして俺にアイスを渡す。

「大丈夫だってこのくらい」

「で、でも」

萌は昔から気にしすぎな所がある。

まあ、それが長所でもあるんだけど

なるべくさつきみたいに萌を傷つけないように、この場を和ます方法は

「じゃあ 萌の分も一口もらうってことで」

俺は冗談めかした口調でそう言っただけで萌が食べた分と同じくらいの量を食べる。

「あっ
」

萌の口から漏れたように言葉が発せられる。

「ほら、これでおあいこってことで」

そう言っただけで俺がアイスを渡すと、萌は真っ赤になった顔を隠すように受け取る。

「どうかしたのか？」

「な、何でもないですよ！」

萌はそう言いながら、じっとアイスを見つめる。

「早く食べないと溶けるぞ」

「わ、分かってるです」

萌はそう答えると、しばらく同じようにしてから、決心が出来たかのようにパクパクと食べる。

なんでこんな急いで食ってるんだろ？

俺はマイペースにアイスを食べる。

当然のことながら、萌の方が早く食べ終わる。

「ごちそうさまでした」

萌が礼儀正しく手を合わせる。

その時、萌の口元にアイスがついているのに気付いた。

「萌、アイスついてる」

「え！？ ど、どこです？」

「口元 ああいや、そつちじゃなくて ちよつとじつとしてるよ」

なかなか取れない萌にじれったくなって、俺が指でさつと拭いて、アイスをついた指を舐める。

あんまり行儀よくないけど、まあ、もったいないし。

「あつ」

また萌の口から言葉が漏れる。

「あつ、あつ、ああ」

萌は壊れたロボットみたいにぎこちなく動きながら、同じような言葉を繰り返す。

「萌？　どうかしたのか？」

「か、間接」

俺が聞き取れたのはそこまでだった。

萌は顔を真っ赤にしてぶらっとよろめいたかと思うと、そのまま気が絶してしまった。

第八話、敦君とトラブル（前書き）

昨日のサマーウォーズと今朝のなでしこ見ながら書いていたので読み直したら誤字がたくさんありました

第八話、敦君とトラブル

「うん」

萌の口から苦しそうな声が漏れる。

俺は気絶してしまった萌を抱き抱え、ベンチに横に寝させた。

すぐに起きるかと思って”この体勢”にしたんだけども 5分以上経っても、起きる気配がない。

もしかして本格的にヤバイんじゃないか なんて思いながら顔を覗き込むと、萌はようやく目を覚ました。

「萌、大丈夫か!？」

「あ、あれ？」

萌は未だに寝ぼけているようにぼーっとしている。

「」

「」

数秒、お互いに沈黙したまま見つめ合う。

「」

そして、ようやく状況が理解出来たのか、顔を真っ赤にする。

「あ、あ、あああの、す、すみませんです！」

萌ががばつと起き上がる。

そうすれば萌の顔を覗き込んでいた俺の顔に当然ぶつかる。

「痛！」

「い、ごめんなさいですっ！」

萌は謝りながらも額を押さえてまた俺の膝の上に横になる。

「あ、あれ？」

萌は自分が枕にしている、俺の足に触る。

「え、え、えええ！」

萌が未だかつてないほどの声量で叫んでまた跳ね起きる。

「な、なんで ひ、膝枕」

萌の顔はこれ以上ないくらい真っ赤になっていた。

例えるならトマトとか。

「いや、いきなりぶつ倒れたから、とりあえず休ませようかとベンチ探して で、そのまま頭をベンチにのせるのもアレかと思って膝枕 やっぱマズかったか？」

「いいいいいえ、全然そんなことは！ むしろ嬉しいくらいで！」

「そ、そっか、なら良かった」

萌の普段は見せない迫力に気圧される。

今日の萌はどこか変だ。

これはやっぱり

「ごめんな、萌」

「え？」

萌は何で謝られたのかわかりません、というような顔をする。

「体調悪いのに、付き合わせちゃって」

「た、体調は大丈夫ですよ！」

「だけど、今日の萌は変だ。なんかぼーっとしてるし、ずっと顔赤いし、よく叫ぶし、それに 事実ぶっ倒れてるし」

「こ、これは ひ、貧血ですよ！ その、今ダイエット中なんです！」

「ダイエット ？」

萌の体を見る。

確かに”脂肪”はあるけど

「敦さん、目がいやらしいです」

萌に睨まれてしまった。

「いや、でも痩せるべきところは痩せてると思うけど 食事抜くとかあんまり良くないしな」

俺がそう言つと萌は俺から顔を逸らす。

「萌」

「ぬ、抜いてませんです！ 別に朝食抜いてませんですよ！」

相変わらず嘘が下手だな

つてか、だから貧血になつたんじゃないか？

「力士と真逆のことすりゃ痩せるんじゃないか？」

「え？」

「摂取する量を増やさずに五食くらいに分けて、食べた後に運動したら痩せるって」

俺がそう言つと、萌は少し考えてから俺を見る。

「あ、敦さんは 痩せてる人の方が好きですか？」

「俺？」

何で俺の好みを　？

「まあ、どつちでもいいけど　ウエスト60切つてたり、あんまり太すぎたりするのはちょっとな　健康的な方が好きだし」

「ほ、本当ですか！」

萌がぱつと顔を輝かせる。

「あ、ああ　」

萌は一人の世界に入ってぶつぶつ呟いてる。

「あゝ、萌？」

呼びかけても返事がない。

とりあえず萌を膝から起こして立ち上がる。

冷たい物とか当てたら元に戻るかな

「飲み物買って来るから」

おそらく聞いていない萌にとりあえず伝え、近くの自販機に飲み物を買うに行く。

適当に飲み物を買って戻ると、なぜか萌は不良っぽい男二人に絡ま

れていた。

一分くらいしか経ってないのに

まあ、このままじゃ危ないだろうし、助けないとな。

「なんかあったのか？」

「あ、敦さん」

「あ？ なんだテメエ」

男の片割れが俺に詰め寄る。

「ごめん近寄らないで口臭い」

「ふざけてんのかテメエ！」

俺が素直に感想を述べると男が殴りかかって来る。

男の拳が俺の顔面に当たる。

「あ、敦さん、だ、大丈夫ですか！？」

萌が焦った様子で俺の傍に来る。

「だからあ、こんな男ほつといて俺達と来いって」

俺を殴った方じゃない男が萌に話しかけながら萌の手を取る。

どうもナンパされてるようだった。

まあ、萌は普通に可愛いしな

「ですから！ 私はいかないって」

「大丈夫だって。ちょーと話をするだけだから」

「そうそう。こんな奴ほっとして俺らと行こうぜ」

どうも俺がいなくなってからしつこく言い寄っているようだ。

「ですから」

萌が俺の顔をちらちら見ながら断り続ける。

男達はしびれを切らしたのか、萌の背中に手を回し、強引に萌を連れて行こうとする。

「きゃっ！ ちょ、ちょっと待って」

「だーい丈夫だって。すぐ終わるから」

「そう言うことじゃなくて」

「待てよ、嫌がってんだろ」

俺が萌の手を掴んでいる方の男の肩を掴むと、男はこっちを睨む。

「ああ、君まだいたんだ」

「そいつは俺のツレだ」

俺がそう言った時、つまり萌は男の意識が完全にこちらに移った時、萌は男の腕を捻る。

萌は見た目によらず結構格闘技が得意だ。

「痛たたたた！」

男は腕を離し、萌はこちらに戻って来ようとする。

「テメ、このクソ女あまあ！」

しかし、もう一人の男が、萌を突き飛ばした。

瞬間、俺の中の何かのスイッチが入る。

自分の中の全てが、黒い何かに塗り潰される。

「敦さん！」

萌の声が聞こえた。

俺の意識が保てたのはそこまでだった。

視界が真っ黒になっていった。

気がつく、俺は未来と萌の家に行った。

「気がついたのね」

未来の声がした。

見ると、未来だけじゃなく、萌と光もいる。

「あの　大丈夫、ですか？」

萌が心配そうに聞いてくる。

「大丈夫に決まってんだろ。こいつ、一発しか喰らってないんだから」

俺が答える前に光が答えた。

「また　”アレ”が出ちゃったのね」

未来が呆れたとも心配してるともとれるような口調で言う。

”アレ”　俺の中にもう一人の俺。

昔に起きた事故の影響で、俺は軽い二重人格になった。

といっても、普段は全く出てこない。

出て来るのは、俺の怒りがピークになった時のみ。

ただ、そのせいなのか、出て来るのはかなり残虐な性格な奴で、結

構相手を痛い目に遭わせてしまう。

止めれるのは未来、萌、光、順平、絵里さん、銅先生の六人だけ。

この二重人格のせいで、俺は結構危ない奴と思われ、入学した当初はあんまりクラスに溶け込めなかった。

ただ、一年という時間と、未来達のフォローのおかげで、なんとか去年のゴールデンウィークまでにはクラスメート達とは普通に遊びに呼ばれるくらいに仲良くなれ、去年の夏休みが終わった頃には学校全体が俺のことを理解してくれ、普通に接して来てくれるようになった。

まあ、たまにびくびくしてる人もいるけど。

「みただいな」

「ちなみに、奴らは順平が片付けてたから、心配いらなくて」

光が笑顔で俺に告げる。

「また巻き込んでゴメン」

「それは萌に言いなさい。この子が止めたんだから。私達は後片付けしただけ」

「そうなのか　ごめんな、萌」

「そんな、全然大丈夫ですよ！　っていうか、もともと私のせいですし」

「何言つてんだ、悪いのはあの男達だろ？」

光が萌の背中をバシバシ叩く。

「い、痛いですよ光さん！」

「それで　これからどうするの？　もう少ししたら、お母さん達帰って来るけど　」

未来が二人を見ないふりしながら俺に訊く。

俺が答える前に、俺の携帯が鳴った。

「ごめん、電話だ」

携帯を開くと、絵里さんからだった。

「誰から？」

「絵里さん　もしもし？」

『あ、敦さん！？　良かった、やっと繋がった　さっきからずっと電話したりメールしたりしてるのに、全然返って来ないから』

絵里さんは安堵と心配が入り交じったような声だった。

「ああっと　ちょっと立て込んで。それで、どうしたの？」

『あ、それが大変なんです！　とにかく大急ぎで帰ってきて下さい』

！」

今度は焦ったような声。

本当に何か大変なことが起きてるらしい。

「ああうん、分かった。すぐ行く」

俺は電話を切り、立ち上がる。

「なんかあったらしいから、もう帰らなきゃみたい」

俺が未来に言うと、未来は僅かに残念そうにする（多分普通の奴なら見逃すくらいの微弱な変化だけ）

「そう　じゃあ、しょうがないわね」

「ああ、また今度お邪魔するよ。久々におばさん達に会いたいし

」

「お母さんに伝えておくわ　じゃ、私はちょっと萌に話があるから」

「奇遇だな、未来。俺もだ」

未来と光が萌を見る。

萌は冷や汗を流し、逃げ出そうとするが、光に捕まる。

「どうして逃げるのかしら？」

「いや、これはその」

「なんか、やましいことでもあるのかな？」

未来は笑みを浮かべながら萌に近づく。

未来も光も笑っているように見えるが、目が笑っていない。

「これは　ねえ？」

「これは　なあ？」

珍しく未来と光の息が合っている。

「あ、あの、その、これは　」

萌が困った表情で俺を見る。

明らかに助けを求めている。

「　じゃ、そういうことで」

「あ、敦さん!？」

「じゃあね、敦」

「また明日」

「ちょ、ちょっと待って　」

俺は萌達に背を向け逃げ出す。

ごめん、萌　今の二人は無双状態だ　俺も命は惜しい。

「さあって　どうしてくれようか」

「何したか、とりあえず体に聞いてみるか」

「ちよ、ちよっと待って　きゃははははー！」

廊下に出ると、萌の嬌声が聞こえた。

第九話 敦君の訪問者

未来達の家から出てから、寄り道せずに、絵里さんの言われた通りに大急ぎで帰って来た。

玄関の扉を開けると、すぐに異変に気がついた。

靴が一足多い。

普段なら俺が帰って来た時には、絵里さんの靴だけがあるはずだけど、今は女性物の靴がもう一足ある。

「あ、敦さん！ 何してたんですか？」

奥から絵里さんが出てくる。

かなり慌てているようだ。

「まあ色々」と

また我を失って暴れたことは黙っておく。

「何があったの？」

「とにかく大変なんです！」

絵里さんは俺の腕を掴んで引っ張る。

連れてこられたのはリビングだった。

そこには、見覚えのない、綺麗な少女が立っていた。

歳は多分俺と同じくらいで、十人いたら十人が可愛いと答えるような容姿で、シヨートの髪がよく似合っている。

「お客さん？」

「それが」

絵里さんがなぜか困惑したような表情になる。

「お久しぶりです、敦さん」

見覚えのない少女が、俺の名前を呼ぶ。

「久しぶり？」

「覚えていらっしやいませんか？」

少女は首を傾げる。

そんな些細な仕種すら可愛いらしい。

「ああと」

だけど、正直、全く覚えがない。

「覚えていらっしやらないんですね」

「え、いや、えっと」

何て答えるか困っていると、少女がクスツと笑った。

「相変わらずですね、敦さん」

少女はそう言うと、ポケットから写真を取り出し、俺に手渡す。

そこには、小さい時の俺と、幼稚園児くらいの小さな女の子、そして目の前の少女を少し大きくした感じの女性が写っていた。

「これは」

「私の思い出の……写真です。これが私で、これが私の……母親です」

少女は悲しそうな表情になる。

「えっと……」

俺が声をかけようとする前に、目の前の女性は表情を悲しそうな表情にする前の表情に戻す。

「敦さん、この時からすぐに困ってオロオロしてましたね」

そう言うと、真剣な表情をして頭を下げる。

「私は加瀬部梓^{かせべあすひ}。敦さんの許嫁です」

あっさりと言い放たれたその言葉に、俺は理解できなかった。

「は？」

「許嫁です」

梓さんは同じ言葉を繰り返す。

「許嫁？」

「はい、そうです 私達が五歳の時に決まったものですから、覚えてらっしゃらなくても当然ですけど」

そう言っつて梓さんがはにかむ。

可愛いのだが、今の俺にそれを感じる余裕はぶっとんでいた。

「いや、それは」

「昭一様に確認したところ、事実だそうです」

俺が否定をしようとする、絵里さんがさまざまな感情が入り混じった何とも言えない表情で言う。

「え？」

「敦さんもお聞きになりますか？」

絵里さんはそう言っつて携帯電話を取り出し、ジジイにかけて俺に渡す。

「ジジイ、どういことだ」

『そろそろかけてくる頃だと思ったぞ』

「人の話を聞けジジイ」

『梓ちゃんのことじゃろ？』

「ああ、そつだよ」

どうもジジイの手の上で転がされている感じがしてイライラする。

『婚約者の話は本当じゃぞ。彼女にそれを証明させる書類を持たせておる。どうしても信じられないというのなら、彼女に見せてもらえばよい』

ジジイはすでに言うことを決めていたらしく、すらすらと言葉が出てくる。

「何で黙ってた」

『そつちの方が面白いじゃろ？』

「ぶざけっ　　！」

ジジイを怒鳴りつけようとする、電話がブチっと言う音とともに切れた。

「　　」

ようやくジジイが何がしたかったのかが見えてきた。

たぶん、ジジイは最初から恋人を見つけさせる気はなかったんだろう。

ただ、俺にそついう事を意識させたかっただけ。

その状況で、許嫁をこの家に呼び、そついう関係に持ち込みたいそんなところだろう。

「あ、敦さん　落ち着いてください」

絵里さんが心配そつな表情をしながら俺に言う。

「ああ、大丈夫だ　」

俺はとりあえずそつ答えながら、もう一度ジジイに電話する。

『なんじゃ、まだ用か？』

俺は思いつきり息を吸い込み、そして、全力で、全ての思いを言葉に変えて叫んだ。

「つざけんじゃねえこのクソジジイ！！！！！！」

電話の向こうではジジイが椅子からひっくり返ったのか、とてつもない音がしたが、それを無視して電話を切る。

「全然落ち着いてないじゃないですか　」

絵里さんは呆れ気味にそつ言いながらも、なぜか嬉しそつな表情で

俺を見ている。

反面、加瀬部さんはかなりビビっていたようだった。

加瀬部さんのこと、すっかり忘れていた

「あの、加瀬部さん？」

「は、はい？」

加瀬部さんはすっかり怯えきっているようだった。

「その 婚約者とか、そういう事情は分かったんですけど 何で急に俺の所に？ この写真もかなり昔の物だし」

俺が根本的な質問をすると、加瀬部さんは何故か暗い顔をしながら俯く。

「それは その」

「理由はこちらをお読みになられれば理解出来ると思いますよ」

何故か言い淀んでいる加瀬部さんをフォローするように絵里さんが一枚の紙を出す。

紙の初めの文字を見た瞬間、紙を落としそうになった。

これは、遺言状だ。

「これは」

「加瀬部さんのお母様が書かれたそうです」

「え!？」

遺言状がここにあり、それが開封され読める状況にある。

つまりそれは

「私の母が　亡くなったんです」

俺はようやく、加瀬部さんが時折悲しそうな表情をしていたのか理解出来た。

加瀬部さんがその表情をする時は、加瀬部さんの母親の話が出て来る時だった。

「一人になって、どうしてもいいか分からなくて困ってた時に昭一さんが助けてくれたんです。全ての手続きはこっちですから、敦さんと同棲しろって　ですから」

加瀬部さんはそこまで言うと、頭を深々と下げる。

「あ、あの、加瀬部さん？」

「どうか、私をここにいさせて下さい。家事とか、私が出来る事なら何でもしますから　私、ここしか居場所がないんです」

その声は、震えていた。

「 「

だから。

彼女のためになるなら。

「 加瀬部さんがいいなら、いくらでも

いいと思ったんだ。

「本当ですか！」

加瀬部さんがガバツと頭を上げる。

「ええ。絵里さんもそれでいいですよね」

「え、ええ 私は敦さんの意見を尊重します」

絵里さんは複雑そうな表情で答える。

「ありがとうございます！」

「でも 俺なんかで本当にいいんですか？ ジジイに頼めば、
人暮らしても、寮のある学校にだって 「

「いいんです。だって 「

加瀬部さんが、俺が今まで見た中で一番の笑顔になって答える。

俺は知らなかった。

「敦さんの事、好きですから」

その笑顔の、真意に。

キャラ設定

おとわあつし
音羽敦

パーソナルデータ 身長185センチ、体重71キロ、A型。 17歳。

好きな物 スポーツ観戦、酒

嫌いな物 喧嘩、煙草

趣味 音楽鑑賞、カラオケ。

世界的大企業『TOWA』の社長、昭一の孫にて、今現在もつとも社長の座に近い男。 なのだが、『TOWA』を継ぐ気は全くない。容姿に優れ頭脳明晰、運動も出来ると好条件そろっているが、本人はとある理由でモテないと思いきんでいる。

両親は敦が生まれてすぐに他界しており、昭一や家政婦らに育てられた。

女性経験はないがわりと知識はある。

ある程度の関係性を持てば他人をあしらえたり、冗談を言ったりすることが出来るようになるが、基本的に初対面の相手とはまともに喋れないうえに、腹が立つと考えるより先に手が出てしまう悪癖がある。

銅の『甘い言葉は耳半分を受け止める』ということ素直に受け止め、

ちなみに酒も煙草も経験あり。

煙草は好きになれなかったが酒はわりと好きでかなり強い。

しごなみらいこ
椎名未来

パーソナルデータ 身長178センチ、体重68キロ。 A型。 17歳。

好きな物 辛い物、苦い物。

嫌いな物 運動、甘い物。

趣味 読書、パズル、ゲーム。

敦の幼馴染の一人。

モデル並の容姿と優れた記憶力、それを生かす知恵がある。

男子から人気も高いが、告白はすべて断っている。

ただし本人は胸が小さいことを気にしている。

とある理由から、髪をかなり長くしている。

しいなもえの
椎名萌乃

パーソナルデータ 身長147センチ。体重46キロ。O型。16歳。

好きな物 甘い物、陸上競技。

嫌いな物 虫、お化け。

趣味 編み物、絵を描く事。

敦の幼馴染の一人で未来の妹だが、全く似ていない。

小柄ながらスタイルが抜群に良いが、本人にとってはコンプレックス。

学校の勉強は出来る方だが、あまり頭は良くない。

かなりモテるが、敦に惚れているため、告白はすべて断っている。

特に委員会にも部活にも所属していないため、放課後は基本的に敦と一緒に。

ひむろひかる
氷室光

パーソナルデータ 身長184センチ、64キロ。B型。17歳。

好きな物 体を動かす事全般。

嫌いな物 勉強。

趣味 歌を歌うこと。

敦の幼馴染の一人。

結構な金持ちの娘。

底抜けに明るく、誰からも好かれる。

他の二人に比べると運動は出来るが、部活は調理部。

反面、学校の勉強は出来ないが、知恵はある。

グラビア並のプロポーションだが本人にとってはコンプレックス（というよりも、単純に邪魔だと思っている）。

また声もかなりハスキーだがそれは気にいっている。

かなりモテるが、敦に惚れているため、告白はすべて断っている

ななみやえり
七宮絵里

パーソナルデータ 身長167センチ、体重52キロ。A型。22歳。

好きな物 綺麗な物。

嫌いな物 マナーが悪い人。

趣味 料理。

敦の世話をするメイド。

元は社長令嬢だったが、会社が倒産寸前だった所を『TOWA』に救われた礼にと大人同士の意向で敦の世話をする事になった。

一通りの家事は出来るが、朝に弱いため朝食の準備は敦に任せている（本人も気にしている）

あかがねみさき
銅美咲

パーソナルデータ 165センチ。体重51キロ。O型。27歳。

好きな物 体を動かす事。

嫌いな物 軟派な男、虫。

趣味 編み物、ゲーム。

敦達の担任教師。

美人でスタイルもよく童顔なため、一人で町に行くとよくナンパされる。

学校でも同姓異性がかかわらず人気は高い。

敦とは小さいころからの知り合いで、よく勉強を教えていた。

もちろん未来達とも昔からの知り合い。

敦が小さいころに『甘い言葉は耳半分で受け止める』と教え、彼が

鈍感になつたきつかけの一つを作つた。

かさまきじゅんぺい
風巻順平

パーソナルデータ 身長183センチ、体重68キロ。B型。17歳。

好きな物 散歩。

嫌いな物 人付き合い。

敦の悪友。祖父や幼馴染三人より付き合いは短いが、四人よりも敦のことを理解している。

敦には劣るものの、かなりの金持ちの息子であり、人間の汚い部分を子供のころから見てきている。

光や萌乃をからかつて楽しんでるが、基本的には仲は良いが、冗談が通じない未来は少し苦手（嫌いではない）。

敦は馬鹿でモテないと思つてているが、困つた時に頼りなる人物で、異性同姓かかわらず好かれており、女性経験も歳のわりにはある。

女性経験も含め秘密が多く、付き合いの長い敦や光達にさえ本心を出すことは滅多にない。

おひなひ
音羽昭一

パーソナルデータ 身長188センチ、体重82キロ、A型。55歳。

世界的大企業『TOWA』の社長。

見た目はとても孫がいるようには見えないほど若々しく、筋肉隆々だが、喋りは年寄り臭い。

財界のみならず、政界にも通じており、彼の言動が日本を動かすと言つても過言ではない。

お茶目な一面もあるが早くに親を亡くした敦をかなり気にかけている。

ゆくゆくは才覚ある敦に社長を継いでほしいと願ひ、彼が変われるように様々な策を使う。

第十話 敦君と新しい生活

「あ さ 起きてく い

誰かの声がある。

「あつ ん、起きてくだ い

女性の声だ。

「敦さ 起きて下さい」

聞き覚えがあるようなないような

「敦さん、起きてください」

言われた通りに目を覚ます。

すると、目の前には美少女のどアップがあった。

「

頭が全く働かない。

「おはようございます、敦さん」

目の前の美少女がほほ笑む。

「おはようございます」

オウムのようにそのまま返す。

少女は、なぜかメイドの恰好をしている。

「朝ご飯出来てますよ」

「あ、はい え」

俺が返事をする、少女はニコッと笑う。

ちよっとずつ頭が働いてくる。

「もう、朝はきちんと起きなきゃだめですよ」

「え？ ああ」と

「まだ目が覚めませんか？」

「あ ちよ、え？」

少女は困惑している俺を真剣な目で見る。

「目を 覚まさせてあげましょうか？」

少女はそのまま自分の顔を俺の顔に近づいて来る。

「ちよ ちよっと待って！」

すんでのところで昨日の記憶を取り戻す。

「目が覚めましたか？」

目の前の美少女　加瀬部さんが再びほほ笑む。

「ええっと　まあ、何とか　って言うか、なんて恰好してるんですか！！」

「普通のメイド服ですよ？」

「メイド服が普通じゃないんです！！」

「こつこつという恰好、お嫌いですか　？」

俺が叫ぶと加瀬部さんが悲しそうな表情になる。

「いや、嫌いというか　」

目のやり場に困るというか

「こつこつ不満でしたら今すぐ脱ぎますけど　」

加瀬部さんはそう言うとその場で脱ごうとする。

「ちょ、ちょっと待って、ここで脱がないで！！」

「私は　敦さんでしたら見られても　」

「ダメだから！！　自分の部屋で脱いで！！」

なんとか加瀬部さんを追い出してリビングに行くと、そこにはすでに出来立ての朝食が用意されていた。

それは、とても初心者に作れるとは思えないような物だった。

「凄い」

「お気に召しましたか？」

着替えた加瀬部さんが訊いてくる。

「そりゃもう、凄いですよ！ 早く絵里さんも呼ばないと」

俺がそう言うと、加瀬部さんは少し驚いたような顔をする。

「あの人、いつもこんな感じなんですか？」

「こんな感じって まあいつも起きるのは遅いですけど」

「そう ですか」

「それと 『あの人』なんて言い方はして欲しくないです」

「え、あつ すいません」

加瀬部さんはそう言うと頭を下げる。

「それじゃ、私が読んできますから、敦さんはここで待っていてく

「ださい！」

「え、いや、俺が」

加瀬部さんは俺が止めるのも聞かずに絵里さんの部屋に行く。

すると、絵里さんは俺が起こす時よりもシャキッとしながら部屋から出てきた。

「絵里さん、顔洗ってきたら？」

「は、はい」

絵里さんはなぜか落ち込んだような顔をして洗面台に向かう。

「どうやって起こしたんですか？」

「別に、特別な事はしてませんよ」

俺の質問に加瀬部さんにはっこりと笑って質問をはぐらかした。

朝食を食べ終え、俺が出かける支度をし、部屋を出ると、そこには俺と同じ学校の制服を着た加瀬部さんが立っていた。

「え？」

「それじゃ、行きましょう」

「ええっと　どうしてその恰好を？」

「どうしてって　学校に行くために決まってるじゃないですか」

加瀬部さんが悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

「へっ　？」

状況を読み込めない。

「今日から、敦さんと一緒に登校です」

「それって」

俺の学校に転校して来る　ということ？

「これからよろしく願いしますね」

「はっ　はあ！？」

「ちなみに、クラスもいっしょですよ」

加瀬部さんはそう言いながら俺にスルッと近づき、腕をからめる。

思いつきり胸が当たっている。

「ちょ、加瀬部さん！？」

「それじゃ行きましようか」

「ちょ、ま、待ってください!!」

俺が叫ぶと加瀬部さんは立ち止まってくれた。

「どうかしましたか？」

「い、いや、っていうか、色々と一気に急展開なんですけど」

「だって黙ってましたもん」

「な、なんで」

「だって」

加瀬部さんは笑みを浮かべたまま、答えた。

「そっちの方が面白そうじゃないですか」

第十一話 敦君と幼馴染 + 1

「なあ、敦」

「何だよ」

「その娘、誰だ？」

家の外に出た数秒後、当然のように家の前で待っていた光が質問する。

「ああ、この人は」

「加瀬部梓です。敦さんのいいなず」

「親戚！！ 親戚だよ！！」

本当の事を言おうとする加瀬部さんを遮ってごまかす。

「親戚？」

「ちょっと訳があつてウチに住む事になつたんだよ」

隣で睨みつける加瀬部さんを見無視してそれっぽい理由を話す。

「一緒に住んでるのか？」

「まあ、そりゃ俺の家だからな」

俺がそう答えると、光は俺をキツと睨みつける。

「それって 同棲って事だよな？」

「同棲ってか、同居だけだな。絵里さんもいるし」

「私はそっちの方がいいですけど」

俺が弁明しているのに、加瀬部さんが余計な事を言いながら俺の腕に抱き着く。

「敦 お前また」

光の肩がワナワナと震える。

「光？ どうかしたのか？」

「うつせえ馬鹿！！」

光が俺の顔面目掛けて弁当を投げ付けてくる。

かろうじて弁当はキャッチするが、光はそのまま走り去る。

「ちよ、光！？」

俺が呼びかけても、こっちを見ないで走る。

「面白そうな人ですね。友達ですか？」

「幼なじみですよ 早く追いかけないと」

「大丈夫なんじゃないですか？ あの人も学校に行くんでしょ？」

「まあ、そうですね」

「そんなことより」

加瀬部さんは俺の方を向く。

口は笑っているが、目が全く笑っていない。

「何で親戚なんて嘘ついたんですか？」

「えっと それは」

なんとさえばいいか返答に困る。

そもそも自分でも何でごまかしたのかも分かってない。

多分、そのまま言えば、また面倒な事になるからだと思っただけど

本当にそれだけなんだろうか？

光においていかれて、仕方なく二人きりで未来達の家に行くと、光、未来、萌の三人がいた。

「お前ら待ってたのか？」

「聞きたいことがあるからね」

未来はそう言つと加瀬部さんを見る。

「その人が 加瀬部さん？」

「はい、加瀬部梓です」

加瀬部さんはそう言つと頭を下げる。

今度は許婚の事は言わなかった。

「椎名未来です。こっちは妹の椎名萌乃。これは氷室光」

「何で俺だけ”これ”扱いなんだよ」

「よろしくお願いします」

「無視すんなよ！」

未来と光の、半ばコントのようなやり取りを、萌はオロオロとしながら、加瀬部さんは楽しそうにクスクス笑いながら見ている。

「ちよ、ちよつと二人共 ダメです」

「やっぱり面白いですね、光さん」

「それで、訊きたい事つて何なんだ？」

「別にたいした事じゃないんだけどね。どうしてわざわざこんな中途半端なタイミングで転校して来たのか、気になったのよ。しかも、

わざわざ敦の家に住むって、変じゃない」

「転校の理由は一身上の都合。敦さんと同居するのは、家を借りるお金がないからですよ」

「だからって」

未来はそこまで言うと、何かを悟ったような表情になる。

「昭一さんは、許してるの？」

その質問で、今度は光が何かに気がついたような表情になる。

萌乃は全く話についていけないようで、ただひたすらにオロオロしている。

「ええ、きちんと了承を得ました。もちろん、敦さんにも、絵里さんにも」

「そう、ならしやうがないわね。でも、ただの親戚にしてはスキンシップが過激すぎるんじゃない？」

おそらく、未来は光からさっきの光景を聞いたんだろう。

「そんなことないですよ、私、敦さんのこと好きですから」

加瀬部さんは決まりきったことを話すような軽さでさらっと言っただけのけた。

三人は固まったが、未来はいち早く正常に戻り（おそらく男女間の

それではないと判断したんだろう、そのことには触れずに、俺の方を向いた。

「今度はあなたに質問。何で今日までこの事黙ってたの？」

未来はなぜか怒っているように見える。

「いや、黙ってたわけじゃねえよ。俺だって昨日帰ってから知らされたんだ」

「へえ」

「疑ってんのか？ なんなら今からシジイに連絡しても」

「別に疑ってないわよ。あの人ならやりそうだし」

だったらもうちょっとそれに相応しいリアクションをしてくれ

「ま、それならいいわ。行きましようか」

未来はそう言うと、学校の方向に向き直す。

その瞬間、加瀬部さんが俺の腕に抱き着くようにくっついて来る。

さっきと違って、加瀬部さんは胸をより俺の腕に押し付けてくる。

その姿は、未来以外の二人にバッチリ見られていた。

「お前、また何やってんだ！」

「 な、何やってるんですか! 」

二人が同時に叫び、未来もこちらを向く。

「 な、何を 」

「 じゃ、行きましようか 」

「 ちょっと待ちなさい! 」

未来が珍しく感情的になる。

「 どうかしたんですか? 」

「 どうかしてるだろ! お前、何で敦に抱き着いてんだよ! 」

「 え、家族のスキンシップですよ 」

「 dから、そんな過激なスキンシップがあるわけないです! 」

「 最近の家族はこれくらい 」

「 やらないわよ! 」

顔を真っ赤にして叫ぶ三人。

加瀬部さんはクスツと笑う。

「 羨ましいんですか? 」

三人の表情がピタツと止まった。

「はあ、凶星ですね。ま、敦さんは渡しませんけど」

加瀬部さんはそう言うのとダッシュで走り始める。

「あ、ちよ、待ちなさい！」

「待ちやがれ！！」

「待ってたら遅刻しちゃいますよ」

「その手を離して下さいです！！」

四人が叫びながら走る。

加瀬部さんに掴まれてる俺も当然走らされる。

「ちよ、加瀬部さん、今のどついつ」

「あゝ、時間マズいですね 私、早く行かなきゃなんで、かつ飛ばしますよ」

「人の話聞いてませんね！」

加瀬部さんはさらに速度を上げる。

今まで色々ありながらも、ゆったりと過して来た日常の姿は、どこにもなかった。

敦君と日常？の朝

「それじゃあ、私、教務室に行つて来ますね」

萌が自分の同級生達と一緒になつて俺達と別れた後、加瀬部さんは俺達に言った。

「場所、分かるんですか？」

「ええ、まあ あつ」

加瀬部さんは、そこで何かを思いついたような顔になる。

嫌な予感しかしない。

「でも、やっぱり不安なので、着いて来てくれますか？」

加瀬部さんはそう言いながら俺にぴったりとひつつく。

「まあ、いいですけど」

とくに断る理由もないし。

「私が案内するわ」

だけど、未来が一步前に出て加瀬部さんに言う。

「え？」

「何か問題でも？」

未来が冷たく睨む。

「別に問題はないですけど」

加瀬部さんは不満げに呟くと、寂しそうに俺の顔を見る。

これは 俺に断れという事か。

「なあ、みら」

「じゃあ、さっさと行きましょう」

未来は、俺の言葉を聞かずにそう言うと、加瀬部さんの腕を掴んで引っ張る。

当然、加瀬部さんにくっつかれている俺も引っ張られる。

「ちよ、未来！」

俺が未来を呼び止めると、未来はピタッと止まる。

「 どうしてそんなにくっついてるのかしら？」

「何がですか？」

加瀬部さんが笑みを浮かべながらはぐらかす。

「ほら行くぞ、敦」

今度は光が俺の腕を掴み、引っ張る。

当然、俺にくっついていて加瀬部さんも引っ張られる。

そこでようやく、加瀬部さんは俺の腕を離れた。

「早く行かないと時間なくなるわよ」

未来はそう言うと、加瀬部さんの腕を掴んでつかつかと歩いて行く。

「ちょ、ちょっと、早過ぎます!」

加瀬部さんは引きずられるように連れていかれる。

いったい何なんだ……?」

「敦、あの美少女は誰なんだ!」

俺が教室に入った途端、順平が俺に詰め寄る。

「はあ?」

「お前と一緒にいたあのショートカットの美少女だよ!! こんなパチモンじゃなくて!!」

「誰がパチモンだ!!」

「お前その言い方だと自分が美少女だって言ってるようなもんだぞ？」

いつも通り漫才のようなやり取りを始めかねない二人に一応ツッコミをいれる。

「で、誰なんだよ 新しい彼女？」

「は、は！？ そうなのか敦！？」

順平の冗談めいた言葉に、光が過剰に反応する。

「違うよ、ただの親戚 ってか、光にはそう言ったよな」

俺がそう言つと、順平は希望を得たように目を輝かせ、光は安堵したように息を吐く。

「つまり、俺にも希望があるという」

「お前じゃ無理だろ」

順平が全部言い終わる前に光がツッコミをいれる。

まあ、確かに、俺の許婚だしな

「いや、こいつみたいないな女性経験のない男より、俺のような経験豊富な男の方に惹かれるんだよ、ああいうウブそうな少女は！」

順平が俺を指を差しながら力説する。

「見た目でしか判断してないな、お前」

「何言ってるんだ、お前。女はまず見た目だろ」

順平が即答する。

「最低だなお前」

「人間のクズだな、クズ」

俺と光が殆ど同時に言う。

「誰がクズだ！」

順平は光の言葉にだけ反応する。

「お前以外の何処にいるんだ、クズ」

「んだと!？」

順平が光を睨む。

いつもなら、ここらへんで未来が「うるさい!」と一喝して止めるのだけど、今は未来がないから誰も止める人間がない。

「ってか、見た目100%って事は、光とか未来とか萌とかでもないのか、クズ」

俺も光に便乗してみる。

光を見ると、褒められたからか顔が耳の先まで真っ赤になって、口をパクパクさせている。

「テメエまで俺をクズ扱いするんじゃない！」

いや、真意が分からんけど、言葉だけなら相当なクズ野郎だぞ

「ってか、萌ちゃんはまだ中身もしつかり女の子だけど、コレとか未来とか中身女じゃねえじゃん？　そういうのはパス」

順平がぺらぺら喋っている間に、未来が扉を開けて入って来た。

「コレは中身男だし、未来なんか中身人間なのかも疑わぎゃあッ！
！」

未来に気付かなかった順平は、もの見事に未来に蹴飛ばされた。

「何か言っただかしら」

未来は珍しく笑みを浮かべて順平に質問をする。

ただ、当然ながら目は笑っていない。

「　いえ　何も　」

相当ダメージがデカイのか、順平はその場から動かず、手と口だけで否定した。

「ならいいけど　それで、何でこの子はバグってるの？」

未来が光を指差す。

そこには、魂が抜けたかのように力なく座って、にやける光の姿があった。

「ちよ、光！？　どうかしたのか！？」

俺が光に話しかけても、光はよく分からない言葉を呟き続ける。

なんとか聞き取れたのは、「敦が」とか、「綺麗」という言葉。

「ああ、そう言う事」

俺が光のつわごとを聞いている間に、未来は倒れたままの順平からいきさつを聞いたようだった。

「敦、心配しなくても大丈夫よ。すぐに『直る』から」

「治る？」

「そ、『直る』」

未来はそう言うと、光を抱き抱えて教室を出ようとした。

「あ、そうだ」

未来は何かを思い出したらしく、こちらを振り返った。

「敦、ちょっといい？」

「何？ 光の治療に俺が必要なのか？」

「そうじゃないわ。むしろ邪魔。とにかく来て」

俺は未来に言われた通りに未来についていく。

しばらくして、人気がない場所に来た。

「ここらへんでいいかしら」

未来はそう呟きながら、お花畑にトリップしたようなちょっと危ない笑みを浮かべる光を地面に寝せる。

「何がだ？」

「こつちの話よ 敦、ここに立って」

未来は、自分の一歩か二歩くらい離れた所に立たせる。

「これでいいのか？」

返事はなかった。

未来の足が消え、ちらつとスカートの中身が見えたと思った時には、俺の体が空中に浮いていた。

そのまま、地面に叩きつけられる。

「ま、そういう事だから」

未来はすっきりしたような表情でまた光を抱き抱えて去って行く。

何なんだいったい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3796s/>

敦君の嫁探しっ！

2011年11月16日02時03分発行